

<研究課題> 高齢者福祉政策の基盤としての老年哲学の混合研究方法による再検討

代表研究者 東京大学大学院医学系研究科 講師 中澤 栄輔
 共同研究者 東京大学大学院医学系研究科 名誉教授 赤林 朗
 慶應義塾大学院健康マネジメント研究科 教授 前田 正一
 東京大学大学院医学系研究科 助教 宇田川 誠
 東京大学大学院医学系研究科 大学院生 稲生 宏泰

【抄録】

社会から疎外される高齢者の問題は深刻度を増している。高齢者の個々のニーズを満たす福祉の実現のために、高齢者の価値観・生命観と非高齢者のそれとの「ずれ」を認識し、調整していく必要がある。本研究では、老いの本質と老いる人間の価値を問い、高齢者の価値観・生命観を炙り出すことを目的とした。方法は哲学的混合研究方法を採用し、理論的研究を通して老いの価値を提示し、調査研究によってそれを補った。日本における老いには、老成という積極的価値と、加齢に伴って生活や人生についての不安が増大するなど、消極的価値の両側面がある。これを踏まえて、高齢者の尊厳に関する提言「現代のダイナミックに変化するコミュニティの一員としてその力を発揮することができるよう高齢者をアドボケートする」を提示した。研究の成果は、ニーズに即した高齢者福祉政策の実現、および人間として尊厳を取り戻す高齢者の新たなあり方の構築に貢献しうるものである。

1. 研究の目的

1-1 高齢者観の変遷と社会の変遷に関する問題意識——研究を導く根源的問い

高齢者の孤独死、虐待、エイジズムなど、高齢者の人格へのリスペクトが軽んじられる社会は正義に根ざしたものではない。老いることの本質を見極め、老いに価値の変容を見出し、それを肯定的に捉えていくことは、ニーズに即した高齢者福祉政策を実現させるために必要であり、それ自体に社会的意義がある。そうした老いることの本質を見極める学は、老年哲学と位置づけられる。この、高齢者の価値観・生命観を扱う老年哲学という根本的な次元を問う学に遡ることで、高齢者福祉政策の根幹を問い直すことは極めて独創性の高いテーマであり、研究目的に値する。以上の背景に基づいて、本研究では、老年哲学という視座にたち、それを彫琢することで、現代の高齢者の価値観を照らし出し、高齢者の社会へのニーズ、それも満たされないニーズを明らかにしていくことを目指すことにした。しばしば倫理や哲学は実用的ではないと言われる。しかし、老年哲学は応用倫理・応用哲学の一分野として、実践への哲学的知見の適用を自身の使命とみなすべきものである。

そもそも現代日本において、高齢者が果たす役割は何だろうか。医学の発達で、寿命はのびたが、必ずしも健康年齢がそれに応じて延長しているとは言い難い状況である。現在の高齢者の幸福度は上がったのだろうか。現代において、老いるとはどういうことか、高齢者の生きがい

とは何なのか、を探る重要な社会的意義が本研究にある。

COVID-19を経て、日本における社会格差が顕著に現れるようになってしまった。これまで潜んでいた社会格差、社会の分断が明瞭なしかたで表出してきたとも言える。孤立した高齢者とそのQOLの問題は深刻である。古来日本には高齢者を尊重する風土があった。しかし、しばしば現代日本において高齢者へのリスペクトがうすれていくと指摘される。本研究は高齢者の生きる価値を再発見するという社会的意義をも有すると考えられる。

1-2 生命・医療倫理学における研究動向における本研究の位置づけ——アドバンス・ケア・プランニングに関する議論を巡って

本研究は現在の高齢者医療に関する生命・医療倫理学における議論に一石を投じるものであると考えられる。高齢者の医療に関する意思決定に関して、現在、盛んに議論されている領域がアドバンス・ケア・プランニング (Advance care planning: ACP) である。ACPとは、延命治療など終末期に関わる医療を含めて、ライフコースにおいて生じる治療上の意思決定について、あらかじめ家族や医療従事者を交えて議論し、事前のケアの方針を明示化するプロセスを指す。「人生会議」という標語など(「人生会議」とACPは厳密に言うとは異なるという見解があることには注意が必要である)、ACPを以下に広めていくのか、その方策について生命・医療倫理学領域では議論が盛んである。ま

た、同時に、ACP の理念とその哲学的含意についての生命・医療倫理的考察も進んでいる。その中には、ACP の概念的可能性を問うものもあり、その視点は本研究の視座である老年哲学と共有すべき点を有する。すなわち、ACP は何故行うのだろうか。ACP を推進しようとする最大の動機は自己決定権の尊重である。極めて西洋近代的と言える自己決定権の尊重であるが、これは必ずしも万能とは言えない、むしろ弱くだれかの助けを常に必要とするわれわれ人間の実情に即したシステムであるとは言いがたい。だれでも、未来に関しては不可知であり、明確な像を未来に結ぶことができる人などいない。このことはACP が根源的に困難を抱えているということを示す。また、終末期の治療について家族と話し合うべきであるとは考えていても、実際に家族と話し合った経験はない、という高齢者は多数にのぼることがこれまでの調査から知られている。そもそも、自分自身のケアの方針について文書で示すのは抵抗があり、ましてや死のことは考えたくなく、しかるべき時は家族や親しい友人にお任せする、という心情は理解可能であるし、ある意味でそれは日本的な価値の表出であろう。そうしたとき、生命・医療倫理の議論領域で問われる「どうしたらACP は広く日本に根付くか」という問いは、老いること、死についての哲学的考察・現代日本人の価値観を顕わにしてから取り組まないと無駄になってしまう問いとなる可能性があるだろう。こうした意味で、実際の、そして現実的な問題に対処する生命・医療倫理学に対して、老年哲学はその背景となる理論を検討し、それによって生命・医療倫理学の発展に貢献するという関係を有する。

2. 研究方法と経過

2-1 文献研究・理論研究

本研究ではまず、古代から現代にわたる老年哲学の主要な流れを概観する。その上で老いの本質と老いる人間の価値についての哲学史的研究により、老いることで差異が生じる価値観・生命観について仮説構築をおこなった。

作業仮説として、老いの経験を通して、自己の疎外が生じ、それが容認されていく過程で人生、社会における重要な価値の変化しうる老いの自己疎外仮説を置き、その中で老いの肯定的経験を再発見する手立てについて考察した。

本研究の方法論は、伝統的な哲学的、および倫理的な理論研究とした。

2-2 調査研究

理論研究の信頼性を担保するため、専門家インタビューを実施し、作業仮説について検討を加えた。専門家インタビューの対象者は、古代ギリシア・ローマ哲学の専門家1名、フランス現象学の専門家1名、科学技術の ELSI の専門家1名、老年医療に携わる専門家1名である。

3. 研究の成果

3-1 文献研究・理論研究の概要

古代より、西洋、東洋を問わず、老いに関する哲学的・倫理的考察が行われてきた。プラトン、アリストテレス、キケロから、フランクル、ボーヴォワールまで、枚挙に暇がない。また、日本においても、和辻哲郎以来、山折哲郎、鶴見俊介、神谷美恵子、吉本隆明、大橋健二、瀬口昌久、上野千鶴子らの論者が著作等を出版している。しかしながら、現代の日本の高齢者が置かれている状況を踏まえた、そしてその福祉の増進にむけた、根本的な価値観・哲学的概念は十分に検討されてるとは言い難い。

以下では、とくに老年に肯定的な価値を見出した論者の代表としてキケロを、そして、老年における否定的な価値を描写し、その問題点を指摘した論者の代表としてボーヴォワールをとりあげ、老年期の QOL を立体的に考察することにする。

3-2 キケロの老年哲学

キケロの『老年について』は、紀元前44年に著された対話形式の随想である。この作品では、人が老年期に直面する一般的な問題や偏見に対処しつつ、老年期を有意義に生きることを探求している。

キケロはカトーを主人公として登場させ、彼が友人たちとの対話を通じて老いの利点とよくある老いについての誤解を説明する。主なテーマは以下の通りである。

活動の継続：カトーは老いても精神的に活動を続けることの重要性を強調する。彼は農業に熱心であり、政治や読書にも関心を持ち続けている。

知恵の蓄積：老年は人生において経験と知恵がもっとも豊かになる時期である。培われた知恵が若い世代への助言に役立ち、ひいては社会全体のための指針を提供する。

心の安寧：カトーは老いがもたらす内面の平和や満足感を強調する。老年に至ってさまざまな欲望が減退することで、むしろそれが心の安定をもたらす、人生の末期を静かに過ごすことができる。

死の受容：死を恐れることなく受け入れる

ことが、賢明な老年期の一部であるとカトーは主張する。彼にとって、死は自然な過程であり、生の完成である。

この『老年について』は高齢者の尊厳と能力を称賛し、若い読者に対して老年に備える智慧と心構えを提供している。老年の価値が力強く語れていることに本著作の価値がある。

3-3 ボーヴォワールの老年哲学

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『老いについて』は、1970年に発表された社会学的な研究であり、老年に対する社会的な態度と高齢者が直面する課題を詳細に分析している。ボーヴォワールの現象学的視点、およびフェミニズム的視点が明瞭に見られる論考である。

まず、ボーヴォワールは、老年の文化的構築という観点から、ときに負のイメージとして捉えられる老年という現象を分析している。老いに対する社会的偏見の形成過程において、特筆すべきは高齢者が経験する疎外と隔離である。

老年期において人は、経済的および社会的地位が低下してしまう。退職による収入の減少、健康問題に伴う医療費の増加、これらは社会保障システムと関連して分析されるべき事柄であるが、多くの国において老年期の社会保障はまだ十分であるとは言い難い。

また、ボーヴォワールは老年期における孤独と社会的隔離について先見的な考察を行っている。友人や同世代の死亡、家族関係の変化により、高齢者はしばしば孤立した状況に置かれ、社会的交流が減少する。

ジェンダー論的観点から、ボーヴォワールは、老いの経験の性差を指摘しており、これはボーヴォワール哲学において非常に特徴的な一面である。女性の老いは若さの喪失であるとともに、女性性の喪失の経験でもある。その意味で、女性は老いることで二重の意味で阻害されていくと言える。

『老いについて』は、キケロの老年哲学とは異なった仕方、老年の意味を明らかにするものであり、画期的な考察であると考えられることができる。現象学的手法を用いることで、老年期のリアリティを追体験し、社会からの支援がどうあるべきか、規範的な議論にまで架橋させる力をもつ。

3-4 総合的考察と提言

古来、日本には高齢者を「老成」として尊ぶ文化がある。「姥捨て山」の伝説を題材にした深沢七郎の『檜山節考』は著名であるが、以前の日本社会は高齢者をコミュニティに受けい

れており、高齢者への尊厳は保たれていた。キケロが主張するような、老成した人の知恵の蓄積を尊重し、安寧で心安らかに暮らす老年期を理想とした世界観が形成されてきた。それとともに、現代日本における高齢者の孤立の問題は、ボーヴォワールが指摘する高齢者の社会的疎外そのものといった状況にある。孤立した高齢者はコミュニティから排除され、生きる価値を見出すことが難しくなる。現代では地域社会が減衰することで既存のコミュニティの存続が危機に瀕しており、コミュニティの再編が進む中で、高齢者が新しいコミュニティに入りづらくなっているという現実がある。たとえば、インターネットを介して形成されるコミュニティへの参加は、IT技術に慣れ親しんでいない高齢者にとってはハードルが高い。すべてが「生産性」という観点から評価されるようないわゆる「現代の感覚」では、高齢者を価値あるものとして尊重する空気の醸成は困難である。しかし、それはあくまでも「生産性」の表面的で、短絡的な理解の結果にほかならない。高齢者をコミュニティに迎えられること、それも、現代のIT社会においてダイナミックに変化するコミュニティに高齢者を迎え入れることは倫理的要請のみならず、いわゆる「生産性」をより高める方途として重要性ももつ。なぜならば、老成した人の諫言と応援を得てこそ、コミュニティは熟成し、よりよいコミュニティとして生産性を高めることができるからに他ならない。我々はこれまで、孤独死問題を中心テーマとする論文において、バイタルサインを送信するウェアラブル機器の装着と地域の訪問看護ステーションの連携により、高齢者の急変を察知するシステムの倫理的要件について検討してきた。また、COVID-19の経験を経て、在宅医療や電話再診が活用されたが、新しい医療様式としての「在宅急性期医療」と「遠隔慢性期医療」に関する倫理的要件の検討を行い、導入の提案をおこなってきた。こうしたこれまでの取り組みと本研究の成果を統合し、現代日本における高齢者の尊厳に関する提言を行おうとすれば次のようになる。我々は老成した人の知恵の深さと安寧で静謐な生活を尊重し、老成した人が現代のダイナミックに変化するコミュニティの一員としてその力を発揮することができるようアドボケートする必要がある。

4. 今後の課題

本研究成果は、老年哲学に基づいた現代日本における高齢者の生活の質の向上へ向けた提

言である。この提言がなされたこと自体が重要性を帯びるものの、この提言はもちろんいまだ一般的なものではない。また、この提言を裏付けるような調査研究もまだ不足している。もちろん、その背景となっている理論研究にしろ、最終的に検討しつくすということはおそらく原理的にできない。

そうした中で、われわれは本研究で到達した提言を、ひとつのステップとして、その先へと理論研究、調査研究を重ねる必要がある。またそれは孤立した高齢者へのアドボケイトの実践とあくまでもセットでなければならず、それ

であってこそ、哲学、倫理学が実践的なものになりうる。

5. 研究成果の公表方法

本研究成果は、今後、さらなる研究を経たうえで、学術論文等で公表する予定である。

以上

Philosophy and ethics for the promotion of health and welfare of the older population

Primary Researcher: Eisuke Nakazawa
Lecturer, The University of Tokyo

Co-researchers: Akira Akabayashi
Professor Emeritus, The University of Tokyo
Shoichi Maeda
Professor, Keio University
Makoto Udagawa
Assistant Professor, The University of Tokyo
Hiroyasu Ino
Doctral Candidate, The University of Tokyo

The issue of the elderly being marginalized by society is becoming increasingly serious. In order to realize welfare that meets the individual needs of the elderly, it is necessary to recognize and adjust the "gap" between the values and sense of life of the elderly and those of non-elderly people. The purpose of this study was to examine the nature of aging and the value of aging human beings, and to expose the values and sense of life of the elderly. The method employed was the philosophical mixed research method, presenting the value of aging through theoretical research and supplementing it with survey research. Aging in Japan has both a positive value of aging and a negative value, such as increased anxiety about life and living as one ages. Based on this, we presented a proposal on the dignity of the elderly: "Advocate for the elderly so that they can demonstrate their strength as members of a modern, dynamically changing community." The results of the research can contribute to the realization of welfare policies for the elderly that meet their needs and to the construction of a new way for the elderly to regain their dignity as human beings.